

134

2021 AUTUMN

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 5

伝 馬遠《採芝図》(部分)
元時代(14C)
絹本墨画淡彩
32.5 × 28 cm



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

星野道夫 時間へのまなざし

八田 真理子(学芸員)

星野道夫(1952-1996)はアラスカに暮らして「自然と人との関わり」をテーマに取り組んだ写真家である。千葉県市川市に生まれ、東京の学校に通った都会育ちの星野は、少年のころから北方の自然に漠然とした憧れを抱いていたという。それが確かなものとなったのは慶応義塾大学に通っていた20歳の夏休みのことだった。星野はアラスカのシシュマレフ村に3カ月ほど滞在してエスキモーの生活とその環境に触れたのである(村との出会いや滞在経緯も運命的なのだが、ここでは割愛する)。帰国後、星野はアラスカに関わるために写真家になることを決意。大学卒業後は動物写真家田中光常の助手を2年間務め、25歳でアラスカ大学野生動物管理学部に入学する。以来、ヒグマの事故で急逝するまでの18年間、極北の山河や動植物などの自然とそれらに関わりあいながら生きる人々を見つめ続け、写真および文章として発表した。

星野による写真の方法論が勇崎哲史の唱えた「思考方法としての写真」に近いと指摘されるように^{*1}、星野にとっての写真は記録や芸術表現のメディアというよりも、思考する手立ての一つだったといえるだろう。加えて星野は、複雑で捉えにくい感覚や観念を、誠実かつ平明な文章で記述することによっても思索を深めていった。彼が撮影と記述から得たものには、アラスカの自然・歴史・文化・環境問題に関する学術的で体感的な理解はもちろんのこと、先住民の精神性や自身の死生観のように、目には見えない事柄への気づきもあった。その多くに通底するのは「時間」へのまなざしではないだろうか。星野の文章には、アラスカでの日々のなかで醸成された時間感覚が散りばめられている。それらは厳密には不可分ながら、およそ三種に分類できそうだ。第一には、現在と並行する「もうひとつの時間」。第二には、最後の氷河期以来の遙かなる「悠久の時間」。第三には、神話の世界の時間である。

第一の「もうひとつの時間」は、私たちの忙しい日常からは遠いものの、並行して確かにある壮大な自然とそこに流れる時間のことである。こうした現実への自覚は、私たちにふとした俯瞰の眺めをもたらし、時に私たちの存在を揺さぶるものだと星野は感じていたようだ。彼は十代の頃からこうした感覚を抱いていたらしく、東京で電車で揺られている時、あるいは雑踏の中で人込みにもまれている時、ふと、今この瞬間にヒグマが北海道の原野を歩いているのかと頭に浮かんでくるのだという。星野はその感覚を振り返り、「すべてのものに平等に同じ時間が流れている不思議さ」だと換言している^{*2}。彼にとってクマは昔から大自然の象徴だったようで、後にアラスカでクマとの距離感に自然との関わりかたを見出したことを記述するほか^{*3}、被写体としても頻りに撮影している。なかでも図1のグリズリー(ハイイログマ)は、星野の動物写



図1: 草むらに潜むグリズリー



図2: 春のアラスカ北極圏、群れにはぐれてさまようカリブー

真において出色のできばえを示す作品で、初めての写真集『GRIZZLY アラスカの王者』(平凡社、1985年)の表紙ともなった記念碑的な一枚である。グリズリーの視線はレンズと交差しておらず、星野と鑑賞者はあくまで観察者の側に立つ。しかし、草むらに潜み周囲を観察するその佇まいには研ぎ澄まされた野生が満ち、次の瞬間に目が合いそうな緊張感を醸しながら、私たちに「もうひとつの時間」の存在を示唆している。その一方で、強い斜光に照らされた表情はどこか情緒を感じさせ、視線の方向に空間をとった構図は詩的な余韻を誘う。

第二の「悠久の時間」について、星野は「人間の日々の営みをしばし忘れさせる、喜びや悲しみとは関わりのない、もうひとつの大いなる時の流れ」^{*4}と説明するとともに、豊かな経験や見聞に基づいて繰り返して語っている。例えば、グレイシャーベイで見られる数百年単位での植物遷移や^{*5}、繰り返されてきたカリブーの季節移動が連想させる太古の情景^{*6}、あるいは星野が敬愛した生物学者プルーイトが書いた一本のトウヒの木が辿る果てしない旅^{*7}。こうしたエピソードとともに言語化された時間感覚は、星野の写真家としての技術によってみごと芸術に昇華されていく。なかでも図2のツンドラを歩むカリブーを捉えた写真はまさしく「悠久の時を旅する」と題された本展のメインビジュアルとして、そして何より、時間について思考し続けた星野の代表作としてふさわしい。空の面積をわずかとしたフレーミングにより風景の抽象性は高まり、霧を背景とするカリブーは孤独感を強める。群れからはぐれた個体に待つのは死ななかもしれない。けれども、星野が逃さず捉えた自然の断章ともいえる奇跡的なこの一瞬から、鑑賞者はカリブーの遙かなる旅を思うのである。

第三の神話の世界の時間は、星野が新たに取り組もうとしていたテーマに関わる。星野は37歳でフェアバンクスに家を建てると、土地と自身との繋がりをより意識するようになった。やがてアラスカ先住民のルーツに関心を抱き、南東アラスカとシベリアなどの離れた土地に共通して残るワタリガラスの伝説を追い始める。彼は朽ちゆくトーテムポールや博物館に収められた民具と工芸品を撮影していくが、最も強く惹かれたのは、物語を伝承してきた人々そのものだったようだ^{*8}。先住民の古老たちを撮るのに一部モノクロフィルムを用いたことには、神話を語って異世界と今を行き来する彼らについて、その風格を克明に描き出す意図があったのだろう。星野の旅は未完に終わったものの、思考の痕跡である写真群は、彼の語ろうとした物語の壮大さを伝えている。

星野はアラスカ大学の博物館にまつわる短い文章のなかで、次のように言う。「時々、遠くを見ること。それは現実の中で、悠久なるものとの出会いを与えてくれる。」^{*9}このたびの星野道夫展がそうした出会いの場となれば嬉しい。

- *1 鳥海直美「星野道夫著作解題 ありのままに生きることのフラジリティ」『ユリイカ特集=星野道夫の世界』青土社、2003年
鳥海は『表現者』(スイッチ・パブリッシング、1998年)所収のインタビューでの星野の発言に彼の写真の方法論が表れており、勇崎の提起した概念に通じると指摘している。
- *2 「もうひとつの時間」『旅をする木』文藝春秋、1995年
- *3 「北極への門」『アラスカ 光と風』六興出版、1986年
- *4 「赤い絶壁の入り江」前掲『旅をする木』
- *5 「氷の国へ」前掲『アラスカ 光と風』
- *6 「白夜」前掲『旅をする木』、「ハント・リバーを上って」『イニクニック [生命]』新潮社、1993年 ほか
- *7 「旅をする木」前掲『旅をする木』
- *8 「森と氷河と鯨 ワタリガラスの伝説を求めて」世界文化社、1996年
- *9 「アラスカのライオン」『Alaska 風のような物語』小学館、1991年

【特別展】「星野道夫 悠久の時を旅する」(会期:2021年9月28日~11月7日)

草間喆雄 美しき色彩のコンポジション

KUSAMA Tetsuo Beautiful Color and Composition

福富 幸(学芸課長)



《Horizon-1》2021年 2重織 作家蔵

糸や布、染めや織りは、民族衣装といった伝統工芸的なものから流行のハイファッションまで《被服》に関わるところが大きいですが、実はさまざまなものにも用いられています。

日本は、古くから高度な染め織りの技術で豊かな表現世界を作り上げてきたことから、近代以降もその分野では欧米に引けをとりませんでした。「京の着倒れ」と謳われ、染めの友禅、織りの西陣を擁する京都は、その拠点のひとつであり、武蔵野美術大学を卒業した草間喆雄が就職した川島織物(現川島セルコン)も天保14(1843)年創業の呉服商からスタートし、和装や祭礼幕のみならず室内装飾、カーテン、産業資材まで幅広く手がけるメーカーでした。草間は諸外国の動向にも敏感で情報収集に努めていた勤め先で、1960年代に欧米を中心に胎動し始めた新しい《織》の造形を知り渡米を決意、クランブルックアカデミーオブアート大学院に学びました。川島ではもうひとつ、盟友小林正和(1944-2004)との出会いもありました。

草間は1970年代から日米を行き来しながら国際ファブリックデザイン展、今日の造形[織]アメリカと日本展、ローザンヌ・タペストリービエンナーレ展などに作品を発表。そこには小林の姿もあり、ふたりは日本のファイバーアートの旗手として活躍しました。縁あってふたりは、平成5(1993)年岡山県立大学の開学に伴い来岡、岡山ではまだファイバーアートや現

代テキスタイルといったジャンルはそれほど知られていなかったのではないかと思います。惜しくも道半ばで小林は病に倒れますが、草間は平成23(2011)年定年退官まで自身の制作と後進の指導に尽力しました。現在も岡山県赤磐市の工房で精力的に創作活動を続け、近年では中国・国際ファイバーアートビエンナーレで連続受賞するなど、日本のファイバーアートの第一人者として国際的にも高く評価されています。

草間は鮮明で美しい色糸を用い、立体的に構築した織作品、細いワイヤをコイリングし束ねあわせた作品、あるいは小さな丸いフェルトを重ねてビス打ちした作品など、いずれもあふれ出る美しい色と色の響き合いが魅力的な作品を次々に創り出し、伝統工芸とは異なる染め織りの魅力を発信し続けています。本県においてファイバーアート、現代テキスタイルを根付かせ牽引し、彼に続く若い作家が生まれ育っていることを頼もしく思います。

本展は、50年にわたる草間の創作活動を主要な作品で振り返るもので、繊細かつダイナミックな世界をご紹介します。また同時開催として草間作品と「岡山の美術」を展示した空間では、《Drawing Melodies 響き合う表現》と題し、美術とともに音楽や舞踊など地元で活動する若手アーティストらとのジャンルを超えたコラボレーションもお楽しみいただけます。

待つところ 「I氏賞受賞作家展」延期のお知らせ

古川 文子(学芸員)

新型コロナウイルス感染拡大の影響による緊急事態宣言発出を受け、当館でも臨時休館や展覧会期の変更等が続いています。本年11月8日から開催を予定していた、李侖京と築山弘毅による「I氏賞受賞作家展」は、来年度に延期することとなりました。しばらく先の展覧会予告になりますが、二人の作家の近況をお伝えします。

伝統的な絞り染の手法を活かし、毛細血管のような生命力を感じさせる大作《vitality》で、第11回「I氏賞」大賞を受賞した李侖京は、舞踏とのコラボレーションや舞台美術など多方面に活動を展開させています。昨冬には高梁市成羽美術館で、個展「小舟によせる唄」を開催しました。同じく「I氏賞」受賞作家の北川太郎(第5回奨励賞)の個展「空間ポエム」との同時開催により、重厚な石彫作品との素材の対比と、手仕事に根ざした制作意識の共鳴を体感できる構成でした。屋内と屋外がゆるやかに繋がる建築空間で、天候や時間による表情の変化を楽しむこともできました。会期中に行われた舞踏「空(Kū)」では、作品と一体となって躍動する森真保の身体表現に魅了されました。作家が長年交流を深めている舞踏とのコラボレーションを、当館でも実現できればと考えています。

第12回大賞受賞作家の築山弘毅は、受賞後にドイツのシュトゥットガルトから帰国し、故郷である津山市を拠点に、静岡県の浜松市鳴江アートセンターでの滞在制作による展覧会「つなげる絵画」(2020年)、津山市のポートアート&デザイン津山での個展「価値の記憶」(2020年)、勝央美術文学館での「築山弘毅展-INDEX-」(2021年)など、積極的に作品発表を行っています。「価値の記憶」展では、赤レンガや石造りによる大正期の銀行建築を背景に、株価相場の変動を題材とする作品群が、作家の意図する「現代の歴史画」としての風格を漂わせていました。漆や箔など伝統的な材料を取り入れた独自の技法の追求にも、さらなる深化が見られます。受賞作家展では、受賞時の大作《Say hello wave good bye》に続く、屏風形式の連作をご覧ください。

展覧会期の延期に際し、李さん、築山さんとも、制作に専念し、内容の充実を図りたいと前向きな姿勢で準備を進めています。皆さまも、春の訪れを待つような気持ちで、来年度の展示にご期待いただけましたら幸いです。

なお、今年度第15回を迎える「I氏賞」の選考と贈呈については、例年通り準備を進めています。岡山県天神山文化プラザでの選考作品展(会期:2022年2月2日~13日)に並ぶ新進美術家たちの作品に、ぜひご注目ください。



李侖京個展「小舟によせる唄」(会場:高梁市成羽美術館)より《まだ終わらない話~イノチ舟》2020



舞踏「空(Kū)」の一場面



築山弘毅個展「価値の記憶」(会場:ポートアート&デザイン津山)より《Say hello wave good bye》2018



「価値の記憶」展示風景 左:《You made life good again》2019、右:《How I learned to stop worrying and love the bomb》2018

「蕙齋と耳鳥齋」 略画と戯画のコラボレーション

中村 麻里子(副管理者)

新型コロナウイルスの感染拡大が収まりかけては再燃を繰り返し、現在なお第5波が広がり感染者が急増している。他館同様、当館でもコロナ禍の影響で中止・延期を余儀なくされた展覧会がいくつかあり、本年5～6月に開催予定で図録も完成していた「熊本県立美術館所蔵 今西コレクション 肉筆浮世絵の世界 アナザーワールド発見!」もその1つである。幸い熊本県立美術館のご厚意により、最悪の事態「中止」は避けられ、11月13日～12月19日に延期としたが、無事開催できるようにと祈るばかりである。

さて「肉筆浮世絵の世界展」では、いくつかの鑑賞ポイントを提示して、目を凝らして作品を見ていただけるような仕掛けを考えてみた(館ニュース132号参照)。まず今西コレクションの中には歛形蕙齋(1764-1824)筆《隅田川図巻》があり、これを強く印象付けたいと考えた。《江戸一目図屏風》の筆者として知られる蕙齋は、津山藩御用絵師へと異例の出世を遂げた浮世絵師(別号・北尾政美)である。あわせて彼とともに耳鳥齋(生没年不詳)のユーモア溢れる戯画《地獄図巻》にも注目してほしいと思い、この2人をコラボできないかと考えた。接点の有無さえわからない2人だが、両者の表現には「省略の巧みさ」「生き生きとした墨線」等の共通点がある。

そんなことを思案していると、津山郷土博物館で蕙齋作『略画苑』を新収蔵したとの情報を得、特別出品の依頼をした。蕙齋は寛政6(1794)年に『略画式』刊行、その後『人物略画式』『草花略画式』などを次々と発表する。この『略画苑』は巻末に文政3(1820)年江戸須原屋刊とあり、蕙齋57歳作となる。本の内容は、正月～12月の年中行事を中心に、四季折々に働く人々の姿、江戸・京坂それぞれの祭り、六歌仙や七福神等故事人物が31丁にわたり200図余り描かれる。各図に画題が付き、ほぼ全図が多色刷木版画で表されている。

蕙齋は人生の多くを江戸で過ごしたが、一方の耳鳥齋は大坂で活動した。耳鳥齋版本のスタートは安永9(1780)年刊『絵本水や空』で、この本は京坂・江戸それぞれの歌舞伎役者43名を個々の特徴を巧みにとらえて単純化させ、個性を強調して描き出している。各役者の顔は、鼻が誇張されたものもあるが、多くは目と口だけ描かれ、ほほえましい表情をしている。国立国会図書館本の奥付より、京都と名古屋で出版されたことがわかる。

耳鳥齋没後の刊行になるが、京坂の年中行事を描いた享和3(1803)年刊『かつらかさね』や、文化2(1805)年刊『画本古鳥図賢比』は、版本における耳鳥齋の代表作である。

『絵本水や空』刊行の頃、蕙齋はまだ黄表紙の挿図に多く取り組んでいた。耳鳥齋が肉筆で《地獄図巻》とその類品数点を制作したのは寛政5(1793)年頃だが、蕙齋が略画式を始めたのはその約2年後である。蕙齋は大坂の耳鳥齋の評判を聞きつけていたのだろうか。あるいは版本を目にしていたのだろうか。

蕙齋の『略画苑』の中には、働く人々の姿が多く描かれるが、耳鳥齋《地獄図巻》にも31図の様々な職種の地獄が表されており、類似の場面を探してみた。比較的緻密に描かれている肉筆《近世職人尽絵詞》(1804～6年、東京国立博物館)の存在を合わせて考えると興味深い。



1



2



3



4



5



6

蕙齋『略画苑』より
1.《立花》、2.《すまひ(相撲)》、
3.《いとくるま》
耳鳥齋『地獄図巻』より
4.《立花師》、5.《すもふ取(相撲取り)》、
6.《芸子母》

【特別展】「熊本県立美術館所蔵 今西コレクション 肉筆浮世絵の世界 アナザーワールド発見!」
(会期:2021年11月13日～12月19日)

展覧会スケジュール

9月
September

9月8日|水|—9月19日|日|
第72回 岡山県美術展覧会

9月14日|火|—11月3日|水・祝|
【岡山の美術展】
草間喆雄
美しき色彩のコンポジション

9月28日|火|—11月7日|日|
【特別展】
星野道夫 悠久の時を旅する

星野道夫はアラスカに生きた写真家です。少年の頃から北の自然に憧れた星野は、北極圏の大自然とそこに生きる野生動物や人々など、多くの「出会い」を通じて思索を深め、心打つ写真と美しい文章を残しています。本展では、20歳のときに初めて足を踏み入れたアラスカの村の記録から、亡くなる直前まで撮影していたロシアのカムチャツカ半島の写真までを一望します。「自然と人の関わり」を追い続けた星野とその旅の軌跡をご覧ください。

10月
October

11月13日|土|—12月19日|日|
【特別展】
熊本県立美術館所蔵 今西コレクション
肉筆浮世絵の世界 アナザーワールド発見!

肉筆浮世絵とは、江戸時代に庶民間に広く流行した浮世絵版画に対し、絵師が絵筆をとって描く一点限りの絵画のことです。希少性が高く富裕層に愛された肉筆画と、多数の複製を安価で提供する版画とは、同時期にそれぞれの進化を遂げました。本展は今西コレクションの中から厳選された約130点を展示し、美人画や役者絵など江戸文化とともに花開いた肉筆浮世絵の魅力を余すところなく紹介します。花魁や遊女、町娘など美人たちの競演や、ダンディな歌舞伎役者、四季折々の行事や遊び、名所風景など見所満載です。

11月
November

11月18日|木|—12月12日|日|
【特別展】
第68回 日本伝統工芸展 岡山展

前期:12月5日|日|—12月19日|日|
後期:2022年2月20日|日|—3月6日|日|
【教育普及展】
第3回 みんなの参観日

「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」
みんなの参観日は、「図工の時間・美術の時間」の中で大切にされている子どもの思いや主題、そして先生の支援や子ども同士の関わりを切り口とした「子どもの学び」を美術館に展示して、みんながそれを参観する場です。

12月
December

*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

10月2日|土| 14:00～
対談 「草間喆雄とその時代」
講師 辻喜代治氏(フリーキュレーター)、草間喆雄氏
会場 2階ホール(先着180名) ※要申込、聴講無料

10月3日|日| 14:00～
鼎談 「伝統工芸←染織→現代造形」
講師 森口邦彦氏(友禅染・国指定重要無形文化財保持者)、
草間喆雄氏

進行 辻喜代治氏(フリーキュレーター)
会場 2階ホール(先着180名) ※要申込、聴講無料

11月3日|水・祝| 13:30～15:00
記念講演会 「悠久の時を旅する
星野道夫が見続けた風景を
たどって」

講師 星野直子氏(星野道夫事務所代表)
会場 2階ホール(抽選180名) ※要申込、要本展観覧券(半券可)



収蔵品の紹介 Vol. 5
伝 馬遠《採芝図》
元時代(14C) 絹本墨画淡彩 32.5×28cm
童子が山奥で、背後にいる主人のために靈芝(キノコ的一种)を採集している。この画題は隠遁生活とその飢えを癒やす靈芝について詠われた詩「採芝操」に由来するものとみられ、俗世に交わるよりも高潔な理想を守る隠逸の精神を示す。足利義満の所蔵を経て、広島浅野家に伝来した名品である。(八田)

五輪競技を楽しみながら

守安 収

スポーツ観戦を好む私には五輪は絶好の機会。とりわけ気合を入れてテレビの前に座るのは、取り組んだことのある競技が放映される時。はるか昔、小学校では軟式野球。お揃いのユニフォームを着た一塁手。中学校ではバスケット。背が高いだけの選手でしたが、県大会は3位。大学ではラグビー。FWのロックが定位置で、いつもどこか傷んでいました。勤めた県立博物館ではソフトボールのピッチャー。結構球が速かったのですが、上野由岐子さんと比べると静止画レベル。美術館では地下の荷解き場で卓球。昼休みにみんなが集まり、男女関係なくダブルス。これを機縁に結ばれたのが、現倉敷O美術館のY氏とOさんとのカップルです。私は省エネを旨としてあまり動かず、ネットインとエッジを多発するので汚いといわれていました。本性が出るのでしょうか。▼今回の五輪で評価を高めたのは、女子バスケット。彼女たちの3ポイントシュートと鋭く素早い動きに魅せられました。トム・ホーバス監督の「スーパースターはいないけど、スーパーチームだよ」という名言に納得。我ら県立美術館の職員は「スーパーチーム」であってほしいし、そうありたいものです。しかし、美術家はそうはいきません。「スーパースター」でないと、名も作品も残りません。生前に名声を得ていても、没後は誰一人顧みてくれないという事例はいくらでもあります。でも「岡山ゆかり」を前面に打ち出す県立美術館としては、スーパースターの作品を収集・展示するにとどまらず、「岡山」の美術風土に様々な形で貢献した方々のことを見落とさないようにアンテナを張り巡らせておかねばと考えています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

*一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようをお願いいたします。

編集後記

中西ひかる

9月の岡山県立美術館では、中旬に岡山の美術の特別展示として「草間喆雄 美しき色彩のコンポジション」と、月末から特別展「星野道夫 悠久の時を旅する」を開催します。まだ秋には程遠い天気が続きますが、気持ちだけでも一足先に芸術の秋を楽しんでみてはいかがでしょうか。どちらの展覧会も講演会やワークショップなどの関連事業も予定していますが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ほとんどの催し物は要事前申込とさせていただきます。いずれも展覧会をさらに楽しめるような内容になりますので、気になる方はぜひお申し込みをお忘れなく。